

統一思想と平和における女性の役割（草稿）

トーマス・J.ウォード
世界思想研究所の共同議長
公共国際学部・学部長、ブリッジポート大学

要約:

平和に関連した文師の存命中の主要なメッセージ。文師の意志は、彼がその目標を進めるために創設した多くの組織に保存されている。文師は、平和を促進するための女性の役割について何度も話された。平和を促進する特別な能力を持っている女性の本性の様相を認識するのは、重要である。

これは韓鶴子博士が、文師夫妻の代表として、中心的役割を担い、UPF と WFWP の発展を導きながら、韓半島の平和統一と天一国の実現に指導的、助言的役割を果たされる時代に、特に関連しているのである。

過去数年間にわたって、筆者はジュンチャン・チェ博士、クロード・ペロテ博士と共に、統一思想と文師のライフワークが目指すもの——平和の公式——が、最もよく理解されるようによい課題をもって作業してきた。

これは過去の論文を改良したものであるが、女性が平和の促進に果たすことができる役割を特に強調したものである。

序論

文師が創立した数多くの団体、世界平和教授アカデミー、世界平和女性連合、世界平和青年連合、平和連合、世界平和協議会、世界平和連合、世界平和島嶼連合、世界平和大陸連合、世界平和半島連合、世界平和マーシャルアーツ連合、世界平和法曹連合などには、すべて“平和”の名称が付いている。

平和は文鮮明博士のライフワークの中核的な遺産であり、それは彼の教えを受け入れた信者より、むしろ客観的な観察者として、彼の仕事を研究する人によって、最も容易に理解される部分である。

共産主義理論を批判しながらも、共産主義者を憎んだり、人身攻撃的なことをすることなく、時が来れば、自由・共産両陣営を和解せしめようとした文師の数十年間の業績は前例のないものであった。文師は、真の愛から生まれるものが自由、統一、幸福と平和であると説いた。文師のいう平和とは、真の愛が絶対的なものであるように絶対的なものである。

平和は真の愛によって実現されるのであるが、本来、真の愛は四つの愛の体恤として実現される：子供が両親から受ける愛、兄弟姉妹間における、兄と弟のような秩序的な愛、夫婦の愛、そして両親の子供への愛である。

統一思想は、内的な愛とそれに連なる内的な平和が外的な平和に先行しなければならないと主張する。従ってイエスが語った「内的な平和」と、毎年ホリデーシーズンの間、数十億とまでいかなくとも数億の人々が挨拶する「地上の平和」の間には、原因と結果の関係が存在しているのである。

統一思想によれば、真の愛は最初に、父母の愛を通じた子女の愛として現れるが、わずかな例外を除いて、幼児が受ける最も強力な愛の経験は、母親から受ける愛であることは、かなり明白である。

赤ちゃんは西洋式に言えば9カ月、東洋式に言えば10カ月、母親の子宮で育てられる。赤ちゃんは母乳で育ち、愛を学び、母の料理を恋しがり、社会の中で母の背中におんぶされながら、その間に母が与えてくれた世界観を学ぶ。従って、女性は真の平和のための前提条件となる真の愛の最初の鍵を握っている。

平和のためのどんな公式も、調停と平和構築の過程における女性の中心的役割を否定すべきでない。それにもかかわらず、私が調べてみた平和に関するどの教科書も、女性の特別な中心的役割を示していない。

歴史的に、女性がなしたことは、男性に比べてはるかに暴力的でなかった。ヒトラー、スターリン、毛東沢などの、歴史上の大量殺人、大量殺戮の張本人は、ほとんどすべて男性である。歴史的ないわゆる連続殺人犯もほとんど男性である。

男性は他の多くの生物種と同様に、女性に比べて「より強い性」の人種である。その強さは、しばしば大虐殺が行なわれた戦争と戦場で示された。文師のメッセージの何が、女性の役割——闘争を終わらせ永遠の平和を築き上げる位置に立つことができる——を明らかにしているのだろうか？

戦争の起源と闘争の根源

スタンフォード哲学事典(2008) は以下のように戦争を定義する：

「戦争は政治的共同体の間、現実的、意図的な広範囲の武力紛争として理解されるべきである。」

哲学事典はさらに、個人的な争いや部族間の敵対と、戦争を区別している。それにもかかわらず、ある意味では、戦争とは、そのような争いが、国家的、または国際的なスケールへと拡大したものであると主張するかもしれない。戦争に関する簡潔な説明で、フォン・クラウゼビッツは以下のように見ている。

私たちは闘争という、それ自体の要素に目を向けるべきである。戦争はただ大きな規模の闘争である。

もし、数多くの闘争のそれぞれを戦争の単位と見なすならば、二人のレスラーの格闘と見なしてよいであろう。その場合、双方ともに、自分の意思で、相手を排除しようとする。それぞれ相手を投げ捨てて、それ以上抵抗できないようにするのである。したがって、戦争は自分たちの意思を実現させるために敵を屈服させる暴力行為である。²

私たちが「大規模なスケールにおける闘争」³というフォン・クラウゼビッツの戦争観を認めるなら、聖書のカインとアベルの物語をさらなる考察の例として、挙げることができよう。それは反省と再考に値する、特別な例である。

カインとアベルの戦いは殺人になった。確かに、殺人は人間関係の破綻によるものとみなすことができる。破綻の原因は何であったか？ なぜか、神は、カインの供え物を受け入れず、アベルの供え物を受け入れた。

母親として、エバは間違いなくアベルとカインの間の緊張感を知っていたであろう。最初の家庭の破綻の重大な役割を担っていた人物の一人である母親のエバは、兄カインの願いと、神から受け入れられなかった恨み（ハン）にたいして、弟アベルが気遣うように忠告できたのではないかと、想像できる。同時に、エバがより近く神のそばにいたなら、自分の墮落行為のために、カインが自己否定の道を行かなくてはならないと、カインに忠告できたであろう。

カインは、天使長ルーシエルができなかったことを、なさなければならなかった。すなわち、アベルより先に生まれたカインは、ルーシエルの後に創造されたアダムの立場に立っていた弟アベルに従順でなければならなかった。

聖書はリベカと彼女の息子エサウとヤコブの関係に関して、詳細に明らかにしていない。しかしながら、ヤコブによって欺かれたエサウは、父イサクが亡くなったら双子の弟ヤコブを殺そうという決意を固めていた。ハラに逃げるようにヤコブを説得すること以外に、リベカは何をしたのだろうか？

リベカは本来、エサウに与えられることになっていた祝福を弟のヤコブが受けられるように、父イサクを欺きなさいと、ヤコブを押し出した時、彼女はそのことに対して責任を取るとヤコブに言った。

リベカがそのような立場であったので、彼女は、間違いなく、弟を殺そうとするエサウのところに来て、ヤコブは父を欺きたくなかったが、私がヤコブに命じたのだと説明すると、誰でも考えるであろう。そして彼女が、責められるのはヤコブでなくて私であると言えば、エサウのヤコブにたいする心は和らいで、弟ヤコブと和解するようになったと考えられる。彼女は、また彼女の兄であるラバンの元に逃れたヤコブに手紙を送り、兄エサウと仲直りする道を探さなければならぬと言ったかもしれない。

文師によれば、復帰の路程は、母親が中心的なアダムの位置に弟を立てて、兄と和解せしめるという逆のプロセスであると強調された。そして母は、兄と弟を伴って、父

を復帰しなくてはならないのであった。歴史は通常この公式を受け入れなかったので、兄弟の間の敵意は「闘争」をもたらした。

フォン・クラウゼビッツが言ったように、その戦いは戦争に拡大された。(戦争は大規模なスケールにおける闘争である)⁴。

ヘレニズムとヘブライズムにおける女性

統一思想は二つの主要な伝統——ヘレニズムとヘブライズム——について述べている。

ギリシアとユダヤの伝統では、ともに、男性は戦場での勝利者として認められる。実際、ヘブライの伝統では、ダビデは少年時代、ペリシテ人を倒したことで、そして武力でイスラエルの国を拡大させたことで称えられている。

ギリシアの伝統では、ギリシア悲劇や喜劇でよく見られるように、戦場での勝利が、男性が「栄光」を獲得する近道であった。ギリシアの宗教文学におけるヘクター、アポロ、アガメムノン、アキレス、オデュッセイ、そして実在人物であるカリプスやアレクサンダー大王などの人物がそうであった。また周知のごとく、ヘブライの伝統には、ダビデ、ゴリアテ、ヨシュア、ギデオンなどの戦士の一群がある。

ギリシアの伝統では、アカイアとイーリアスにおける戦いの長旅に出かける時、戦士たちは戦争の女神、アテナに敬意を表した。女性が闘争の目的としての中心的な役割をなしたのは、ホメーロスのイーリアスと、スパルタの王メネレイアスの愛人のトロイのヘレンであった。トロイの王プリアモスの息子パリスはヘレンを誘拐した。パリスは偉大なトロイの戦士ヘクトルの兄弟でもあった。

女性の好戦性といわれるものは、ゼウスの妻ヘラの復讐心に基づいている。ヘラは、ゼウスが愛する女性の中で、愛の敵になる誰に対しても無慈悲であった。しかしながら、女性は大抵、戦争を起こす原因であるよりも、戦争の犠牲者であった。女性は闘争の略奪品であった。トロイのヘレンでさえその部類であったといえよう。

しかしながら、ギリシアの伝統においても、20年以上も、すべての求婚を断り、夫の帰りを待ち続けた、オデュッセウスの妻であり、テレマクスの母であるペネロプに見られる貞節と純潔の見本がある。

また、テーベの王オイディプスの娘アンチゴーネのケースがある。彼女は危険を冒しても、テーベの将来をかけた政権争いの戦場で殺しあった二人の兄弟、エテオクレスとポリネイセスを埋葬した⁵。

ヘブライの伝統では、母親の役割における固有の美德が、より明確に示されている。リベカについてはすでに述べたが、アブラハムの妻でイサクの母であるサラとアブラハムの妾でイシマエルの母であるハガルについても、同様なことを見出すことができる。

イシマエルの場合、父から見捨てられ、イサクの場合、父の祭壇の生贄になるという死の危険があったにもかかわらず、どちらの場合にも、息子に父を愛するように教え

る母の姿があったことが分かる。アブラハムに対して不満を抱く点が多くあったとしても、母親たちは息子に父を愛するように教えたのであった。

母の役割と平和の母の概念は、カトリックが平和の母としてしばしば描くイエスの母マリヤについて語る一面である。

歴史における平和の使いとしての女性

歴史的にも、私たちは女性的な変革の行為が非暴力と消極的抵抗に基づいていることを示すことができる。

1919年に始まった韓国の独立運動における、韓国のジャンヌダルクとして記憶される柳寛順も、そのようなケースであった。それはまた、合衆国の公民権運動の成長と発展の鍵となった、バーミンガムのバスボイコット事件の背後にあった精神も、ローザ・パークスによって示されたものであった。また、ビルマの独立運動のアウン・サン・スー・チー女史によってなされている役割も、これに当てはまる。

エリザベス一世、マーガレット・サッチャー、アラゴンのイサベル、ロシアのカテリーナなどのいわゆる女性の軍国主義者においても、彼女たちの人生を研究してみれば、彼女たち（特に最初の二人）の行動は、攻撃を始めるというよりは、侵略に対する反撃というものであったし⁶、ほとんどの場合、女性リーダーが始めたのではなく、顧問の役割の男性のリーダーに関連して取られた行動であった。

平和運動へと導く女性の特性

統一思想では、男女には陰と陽の両方の性質があると強調する。女性は男性より多くの陰的性質を持っており、男性は女性より多くの陽的性質を持っているという。統一思想はこれらの性質の本質について詳しく説明している。

原相論で述べられているように、陽性と陰性は性相と形状の属性である。これは、性相の中に陽性と陰性の属性があり、形状の中にも陽性と陰性の属性があることを意味する⁷。

女性が平和を促進するのに向いていることを理解する助けとなるような、人間の陰性のなかの一つの特性に「記銘力」がある⁸。私はこれを、女性は瞬間を越えて見通す能力に恵まれていると理解する。

何年も前に、イーストガーデンでの文師との会食に、李先生、大谷氏、古田氏、そして私が参席していたが、フィレミニオンステーキをまえにして、文師は私たちに、何を考えるべきか、問われた。私たちは、それぞれ神と文師に感謝し、愛をこめて食事を作った人に感謝するべきであるなど、さまざまな答えをしたが、文師は私たちが持つべき姿勢について説明した：

このステーキはつい最近まで母親に愛されていた子牛であった牛から来たものだ。母親から愛されていた子牛が成長して、今私たちが生きるために犠牲にされた。命を犠牲にしてくれたこの牛をどのように考えるか？ この生き物が与えてくれたエネルギーをいただいて、それを何か素晴らしいこと、永遠の価値あることに用いると約束することによって、この牛は永遠な世界と永遠な価値に結ばれるであろう。あなたがそのように考える時、牛は慰められるであろう⁹。

私は、このような考え方を記銘力（見通す能力）の一例と見なす。私は、女性は物事を時間的に見て、人生における経験を基準として、関連づける能力を与えられていると思う。例えば、母親は他の母親の子供が病気であったり、子供が死んだりするとき、その母親のためにもらい泣く。彼女は、自身の人生からそれがどんなにつらいものであるか、理解しているからである。同じ意味で、彼女は戦争の犠牲者にも同情できる。

統一思想要綱が示す、もう一つの陰性の特性は「沈着」である¹⁰。モーセは、心の平安を失い、ホレブの地で二度目の怒りを爆発させ、岩を二度打ったため、カナンの地に入ることができなかった（民数記 20: 8-12）。心の平静を失うとき、私たちは、自分の位置を見失い、神が見つめるように、物事を見る能力を見失う。男性より平静を保ちえる女性は、怒りに身を任せることなく、引込みのつかない戦闘行為に陥る瞬間に対処できる。

カインはアベルを殺した。

レアはラケルを殺さなかった。

統一思想によれば、陰性のもう一つの特性は、「包容性」である¹¹。女性は、論争している両者を抱擁して、彼らの事情を聞いて、傷ついた者が慰められるように、和解へと導いていく¹²。

性相面における男女の違いについて説明しながら、統一思想は外的な形状面と内的な性相面における男らしさと女らしさについて、述べている。：性相(すなわち知情意)に関する男女の違いは質的な違いである。

すでに説明したように、男性と女性は、知における陽陰、情における陽陰、意における陽陰がある。しかしながら、男女の間には、陽性と陰性に関して質的な違いがある。例えば、情の陽性である喜びにおいても、情の陰性である悲しみにおいても、男女では、その表現が異なっている。比喩的に言えば、この違いを声楽にたとえることができる。高い声域では、テノール(男性)とソプラノ(女性)は陽性に相当し、低い声域では、バス(男性)とアルト(女性)は陰性に相当している。それぞれ、質的な違いがある¹³。

結論

文師の長くて、実りある、犠牲的な生涯の最後の公的な活動は、アベル女性国連の創設であった。その創設に際して、文師は次のように語った。：アベル女性国連は、闘争も戦争もない、永遠なる平和な世界を地上に創設するという撰理的な使命がある¹⁴。

その時、文師は出席者に対して、20年前の1992年4月の世界平和女性連合創設時に、「世界的な女性時代」の到来を宣言したことを思い出させた¹⁵。その時、文師は、女性の新しい役割の彼のビジョンを示して、この時代に、男女の間に存在しなければならない絶対的な平等を強調した：

女性はただ男性の助けをするために、あるいは男性から保護されるためにいるのではない。そうでなくて、女性は、神の女性性の代表として、男性をより完全で、男性らしくするための独立した個人である。

真の愛について言えば、女性は男性の貴重な愛のパートナーである。創造理想の真の愛で結ばれた男性と女性は同等な位置に立つ。また彼らは、どこにいても、互いにもとにいる権利を持っている。財産は等しく彼らに属しているので、彼らは理想的な相続権を有している。

神の理想的な真の愛で一つになった男性と女性は、真の愛を中心として、完全に平等な存在として造られており、同等な位置を占め、同賛する資格を持つだけでなく、同等に所有するのである¹⁶。

文師はその二か月未満の中に逝去された。

そのメッセージの最後の二つのパラグラフで、文師は、平和を促進させるための女性の役割について予言し、韓鶴子女史を未来のモデルとして見つめ、文鮮明師の地上での使命——信者と支持者から真の父母と呼ばれている父母としての使命——を相続されている韓鶴子女史とともに前進するように、と語られた。

21世紀に女性は、平和な世界の建設に向けて推進するエンジンの両輪の一つとして、男性とともに貢献するという、世界史における重大な役割を果たさなければならない。力と技術の世紀を超えて、女性は、愛情深く、平和な性質に特徴づけられる世紀を築く軸となるであろう。そしてその役割は、これまで以上に重要になるであろう。

私は、皆様が真の母の道、真の妻の道、真の娘の道、そして真の意味における自由、平和、幸福のあふれる統一世界を建設するための、真なる女性リーダーになる道を選ぶように、心から願う¹⁷。